

## 1. はじめに

近年、分業化・専門化が加速するに従い専門家と市民の間の距離が増し、両者間を結ぶコミュニケーションの必要性が増してきている。にもかかわらず、現実には必ずしも良好なコミュニケーションが図られているとはいえない。そこで、両者間のコミュニケーションは如何にあるべきかを探り、専門に期待する市民、市民のパートナーとなる専門家の実像を多少センセーショナルに論じた。なお扱う専門は建築分野とするが、他の専門でも事情や本質は同じと考える。

## 2. 市民側の身近な問題

### 2.1 市民が専門家と向き合う身近な問題・事象

- ・新築や増改築
- ・街環境の大きな変化(例:周辺での道路や高層建物の建設)
- ・環境改善(例:緑化、公共建築充実)
- ・地域の活性化(例:街づくり、賑わいづくり)
- ・災害時の避難、補償、修復 ・他。

### 2.2 コミュニケーション

- ・相手との相互理解 → 人格尊重、行為遂行の一環、問題解決へ
- ・条件 概念規定、正確伝達、客観と主観、感情や思い
- ・様相 互いに同格で互いに作り上げ(練り上げ)、説明や教え・学びの様相の場合でも同格にすべき

## 3. 住まいづくりにて

### 3.1 建築の細分化、四種の細分野

「意匠」: 間取りを中心にした空間を計画する分野

「構造」: 空間を柱やはりなどで実現させる分野

「環境設備」: トイレや台所などの設備機器の計画や設置の分野

「施工」: 実際に建設する分野

### 3.2 実際の住宅づくりでは

(0) 基本 **家づくりとは、住み手(建築主)がどんな生活をどのようなライフスタイルで営むかを生活者の専門家として構想し、これに実際の建設の専門家がつくるいわば共同作業のこと。**

(1) 建てるにあたり

- ・生活とライフスタイルの設定  
立地: 通勤、買物環境、文化環境、自然環境、等を考慮
- ・予算と規模の設定 ・依頼先
- ・工事 ・新生活
- ・なお増改築の場合は立地場所を引き継ぐ

(2) 既製品かオーダーか

建売住宅: すでに出来上がっている。

注文住宅: 住み手のニーズに応じて設計し施工。

(3) 専門家への依頼先

- ・ハウスメーカー : 建売もあればオーダーもあり。
- ・工務店(大工): 設計できるところもあるが、施工専門。
- ・設計専門家に依頼、設計者が施工業者をも選定。

(3) 既製品 : いくつかの業者に当たり、

各業者の営業からの説明 → 購入決め

(4) オーダー

- ・ハウスメーカーの選定、営業からの概略の説明

いくつかの間取りのパターンを選ぶ。

- ・設計者や工務店(設計付)の選定  
建築主の意向を設計者と話し合って図面化  
建設中においても建築主は施工の業者と打ち合わせが可。

### 3.3 市民側の知識

(1) 社会の基礎知識として教養として

- ・住生活の常識として専門用語の市民感覚定着  
柱、土台、基礎、屋根等は日常用語。最近、梁が定着。  
マグネットと震度とが定着(以前は混同)。

- ・住みやすさは(物理的環境での)快適さと生活の充実

(2) 教育(街づくりは略)

- ・家庭科教育として住まいの教育
- ・高校では選択科目でかなり奥深く住まい教育。

### 3.4 建築の実際

(1) 設計 ・設計とは何かから始まり専門家は建築主(市民)に説明。教えるのではなく説明が専門家側の義務。

・参考までに、公共建築の設計の際には、利用者と設計者との緻密なコミュニケーションあり。空間へのニーズを建築的空間で実現することを利用者が理解することにもなる。

(2) 構造: ・伝統工法ではなく、模型の組み立てキットのようなイメージでつくる(壁式工法)のがほとんど。

・構造材は壁で覆ってしまうので、みえない構造には金をかけず。昔はむきだしの大黒柱が家を支えるという安心感を付与。

(3) 環境設備

- ・快適さは室内音熱環境から。エアコン設置。高気密工断熱工法。(熱を逃がさないように密閉の部屋づくり、窓の少ない住まい)

(4) 施工

・専門家同士で自分らに都合言いように建設を進め、建築主の言い分は二の次。どうせ分からないからと故意もままあり。

### 3.5 安全性追求

・地盤のいいところを敷地とする。強度の無い地盤は改良して堅固にする。

- ・耐震設計。壁を設ける。→窓が少なくなる。  
柱の無い広い部屋は作らない。  
→柱を本来入れるべき箇所に柱を省くから建物は脆弱。

- ・家具転倒防止。家具を壁に固定するなど。
- ・ブロック塀は作らず生垣を。できれば塀はなしでもいい。

### 3.6 街環境の観点からいえば自分(住民)たちの街を守るスペース

- ・隣家建設: 建て方の規制; 周りの日当たり確保、色合いなどに配慮。街の秩序を尊重、等。
- ・高層建築や高速道路建設、遊戯施設などで環境一変。  
街の秩序は街のもの。壊していいはずが無い。

### 3.7 困った風潮

- ・お金のかけ方では、構造よりも見栄えに金かける。
- ・工務店(大工)よりもハウスメーカーがニーズを汲んでくれる。
- ・最近の流行に乗ったマンションがいい。伝統とかは古臭くて。
- ・悪徳業者に引っかかりたくないので大手メーカーを選択。

## 4. 市民・専門家の構図

## 4.1 市民と専門家

- ・社会の仕組み分類  
専門家と市民：専門行為をもとに(介して)仕分け  
消費者と生産者：物流からの仕分け  
供給者と享受者：サービス中心
- ・市民と専門家

**プロフェッショナル**：中世ヨーロッパで生まれた言葉。

高度な**技術を持って市民から尊敬されている人**のこと。

専門家：特定の知識を持って専門行為を行う人の総称  
最近では**市民のパートナー**と呼ぶこともあり(少数派)

**大工棟梁は市民から尊敬**

ここでは設計家、技術者、現場作業員、行政も含む

市民：専門行為で恩恵を受ける人をさしていたが、  
市民人格を持ったすべての人と捉える。

社会世論や社会ニーズの創出の担い手

## 4.2 コミュニケーションの種類

(1) 市民と専門家との間で

- ・相手：専門家→市民：実務、啓発、展望、公平判断、他  
市民→専門家：依頼、相談、要求、知的支援要求
- ・介在(やりとり)：もの、こと、(知識、情報、感動(情緒)、他
- ・顔面：満足・不満足、快・不快、信頼・疑念、  
選択性(関心有無)、増幅性(反応の度合い)、他

(2) コミュニケーションの効用

専門家の思いや体系を市民が理解。

高度文明社会における生活の充実(向上)。

市民側の知識欲充足。専門家とのコミュニケーションの楽しみ。

知ることや観察。他

## 5. コミュニケーションの実態

機能性と経済性のもとで生活を営む。そんな観点から、建築を市民がどう捉えているのであろうか。市民側がもつ建築(建物と人)観とともに専門家側の専門行為をも含めて、両者間のコミュニケーションの様相をみる。ただし各項目では要点のみの列挙とする。

### 5.1 事前勉強：市民自身の勉強、建築の勉強

(1) 初等中等教育にて

- ・教科「家庭科」、「総合学習」にて生活科学としての建築学び。  
住まうとは、家族での住まい、街に住む、等

(2) 学習について

- ・専門家主導型学習；市民教育により学習、各種出版物からの情報収集としての学習等。
- ・市民主導型市民参加；専門行為の中での判断事項には市民感覚があってしかるべき。現実には市民の存在や市民による判断を避けることもままあり。

(3) 情報収集、ミレニアルに参加 → 知識ストック、判断力育成

- ・情報収集が容易になり素人判断も可。
- ・ときには神経過敏や間違い判断にもなるし、まあいいかあとということにもなる。

・市民感覚(の知識)は専門家の姿勢チェックに役立つ。

(4) 特定側からのつくられた価値と判断

- ・売らんがための宣伝が旺盛。報道が後押し。
- ・技術よりもMD先行で価値づくり。営業優先。
- ・見栄えやMD先行や手間隙不要な志向

## 5.2 企画・計画・設計の段階で

立地が決まり新築を設計者に依頼するケースでのコミュニケーション様相。

(1) 設計：・そもそも「設計って何」から始まる。設計者が住まい手に意義を説明。設計打ち合わせは時には建築や街づくりの学習ということにもなる。そして、住まい手は、家族がどんなライフスタイルで生活を楽しむかを設計者とよく相談する。時には、建築一般論お話しから主義心情やロマンの話にもなれなれば子育てや地域のあり方まで話しが進展。信頼関係築かれる。

・住まい手は、家ができることに喜びを持つので、設計とか何とかはお願いしますってことが実は多い。設計者は住まい手の皆さんと委員会方式でと言う方もおられ、住まうことの楽しさ追求を強調。奥さんはかなり乗ってくれる。

(1) 専門家側からの留意点；一部の専門家には説明の時間がとれないとか伝えが不十分なこともあり。その場合、「専門を知らない市民」という責任のがれの言い方。何を何処までどのように伝えるかが専門家の責務であるのに。

(2) 家族ライフスタイルの設定。話し合いをもって。庭はこのくらいとか、リビングを広くなどの要望を図面化。子どもが大きくなったから自立するので、後日子供部屋を親が使いたい。などの話。

(3) 予算：決められた予算内で出来ることを最大限図るが、多くの場合、優先順位がある。見栄えをよくするのが一番、壁で隠れる柱や梁はみえないだけに重要さが今一認識されにくい。

とくに、軟弱地盤を造成した場合の敷地では、地盤改良にお金を使わないと痛い目に合うのに。また、配管工事もけちると5年後10年後に欠陥が顕著化して修理に多額の修理費がかかるのに。あの時言ってくれれば、の話多し。設計者は親身になって。

(4) 細部の取り決め

木造か鉄筋コンクリート造か、平屋か二階建てか、屋根は瓦か金属板か、壁は、屋根・壁・床などの色、オール電化か電気・ガスか、エアコンや木炭ストーブか、など住まい手が決めていく。専門家はアドバイスするのみ。一方では専門家の押し付けも割合多い。

### 5.3 付帯条件

(1) 快適さ

・窓を開けて外気をという自然志向はあまりない。あるのはエネジーを使ってエアコン使用。エネビージャブジャブ信仰。

・ちょっと寒ければ暖房、ちょっと厚ければ冷房、季節感を肌で感じることも少なくなる。

(2) 安全性について：・見かけがひどくても本質的に安全もあり。

これが市民には違和感となる。またごまかし専門家の温床。

・見かけは安心感と直結。(これを真摯に受け止める専門家あり。ガラス破損はさせない。家具転倒させない。専門家は技術で安全から安心へ考えを転換するようになった。)

(3) 自然環境のとりいれ、庭

・庭に出てという生活主観が少なくなっている。家の内から見ることが少ない分、自然と接しないということ。

### 5.4 施工

(1) 無知では：・鉄筋工事のノウハウ知らない人が施工することも多い。そんな場合、基礎の表面に鉄筋の錆が見えたり、鉄筋がむき出しになったりがままある。

・筋交い(斜め材)は柱と梁の交点に取り付け。施工上やりにくさのため交点出ない箇所に取り付けもある。ひどいのは、筋交い材の長さが足りないものもある。作業員はただ取り付けだけ。不安になった建築主は他専門家の助けを借りメーカー側に厳重抗議。

- ・換気扇を外内逆に取り付けたり。
- (2) モル不足では
  - ・現場作業員のガコ吸い殻が床下に捨てられることもあり。

## 5.5 生活再建、被災地では

被災した場合の話。被災後には、避難所にて避難所暮らし。そのうち仮設住宅に入居し、早い時期に本設の住居に移るが、併せて生活再建の支援も欲しい。

- (1) 仮設住宅では、冬場の結露がはなはだしい。建築の料を集めた仮設がなぜできない。そのうち壊すからということか。
- (2) 被災後の生活再建。
  - ・被災後でも仕事をしたい被災者(建築人)
  - ・復興では地元民に仕事をさせないが地元民の仕事を奪うことなり。
  - ・大手建設系がここぞとばかり建て替えビジネス

## 6. 社会的次元で見ると

### 6.1 建築総体について

- ・都会の建物ゴチャゴチャはいかかなものか。(肯定者もいる)
- ・建物の美しいことや綺麗さはすぐには分からないもの。と決めつけがあるが、**建築評価は専門家感覚ではなく市民感覚で。**
- ・近代的街がいいとか、いや伝統的なのがいいとか。

### 6.2 市民からの見る専門家とその実像

- (1) 専門分化の弊害
  - ・市民サイドでは、その分野の専門家なら何でも知ってるし、何でも出来るはず。もし知らないことがあるなら、それこそ知る努力を、あるいは知識ある人を連れてくる。
  - ・今は専門分化の時代。知識も性人も専門の中のごく一部のみとなる。
  - ・専門家は市民のため最大限努力し、責任も取ってくれる。ましてやいつわりや間違いはありえないが大前提だったが。
  - ・専門家側は、専門分化を前提。市民感覚を専門へのニーズとは捉えない。ガラス破損は被害のうちでない、ブロック塀は倒れるものなど、**専門分化で責任の所在が不明確かつ専門への感覚鈍化。**
  - ・専門分化は知識も責任もすべてに。金に見合ったことのみ実施。無知の放任、無責任体制、ブラックボックス化の受け入れへ。
- (2) 手間をかけたがらない風潮
  - ・議論を嫌がる専門家もいる。めんどろだから。理解だけできないから。そこまでののですか。適当に対処がまだまだ多い。また適当な範囲での対処の適当が問題。
  - ・専門家側の無知；特に現場作業員。先に述べた筋交いの話。
  - ・モラル：先に述べた現場作業員のガコの話。

## 7. 社会的次元でさらに奥深く見ると

### 7.1 専門家側を支える環境

- ▲技術の進む方向
  - ・専門家側：人手不足や作業員レベル低下に対応して、技術は自動施工の方向。考えなくてすむように、**物事をブラックボックス化や単純作業化へ。そして自動施工へ。**
  - ロボット本格導入までは作業員による単純化された施工で。
  - ・市民の声として手間隙かけては造ってもらえない。家が出来ることで喜びたいが、イスマンは市民ファストに反す。こうしたことが当たり前になると、こんなもんかで納得(するかさせられる)。
- ▲専門の中でも細分化
  - ・大量にかつ複雑になる生産に対処するための専門分化がいつとはなしに経済性とリンクした効率の追求

に走るあまり、専門細分化された系どうしのコミュニケーションがなくなり、細分化系を僅かに超える問題にも協議と対応が実施されなくなってきた。

### ▲教育の進む方向

- ・専門教育：最先端までの教育だが、教える内容が広く深いため、専門分化前提で特定の部分専門のみの教育。市民ファストなし。
- ・部分同士を繋ぐ教育は実はまれ。今はデザイナーがその役を担っている。デザイナー教育先行で構造教育は二の次が多い。これは**デザイナーが一番偉い**との信仰を生む。有名建築家の存在根拠

### ・7.2 市民を支える環境

- (1) 専門家に物申す風土、世論作り、市民主権
  - ・耐震偽装や施工不良などのごまかしが今なお僅かとはいえまかり通る。ブロック塀転倒など言うに及ばず。これらを防ぐには市民サイドから声を上げる。幸い、一部開明的なマスコでの取り上げも追い風。ただし、社会体制根幹に関わる事にほとんどのマスコは付度しているが。
  - ・専門家には専門教育をしっかりと。専門家の学協会はリアルにもしっかりと。組織を守るのもいいがまずは市民第一を。
- (2) 専門家も市民：市民感覚が育まれるようなコミュニティ
  - 専門家として市民。近隣での日常生活を健康的に営めば市民感覚が宿るはず。それが発揮できないのは組織論理が邪魔をする。生き残るためには組織論理での組織内最大幸福志向でいいのか。

### 7.3 市民運動

- (1) 市民運動、例
  - 病問題で尽力の方々には敬意を表する。
  - 規模の小さい市民運動はあちこちにある。マンション建設反対、河川流域での飲用会社による地下水汲み上げで周辺住民の井戸枯れ、等。井戸枯れ問題では市民側をアシストする専門家の層が極めて薄い。相手は、国(河川系)を巻き込んで最新の学術技術をもとにした反撃で市民側が劣勢。多くの専門家の結集も。
- (2) 個人抗議運動、例
  - 高岡市のある歴史的なスポットについて根拠なく史跡指定がされているので、これを正す郷土歴史化が指定解除と代替として伝聞指定を求めた。結果は2-3年ものらりくらの行政。都合のいい理屈を程度の低い歴史家にゆだねる行政。そのつど論破する市民。高岡市としては観光資源を失いたくないのと個人抗議に負けたくないために。開明的な何人かの歴史学者も市民に声援を送ったが、結果は変えられず。文化行政を健全に運用などとは思わない部局の方々。彼らにはそのようなことはどうでもいいのであろう。

## 8. 社会の風潮や通念

- (1) 経済至上主義：経済性考慮は当然にしても、過度のコストで安ければ何でもいいのかという風潮。持続可能性の考えに反する。
- (2) 住まい文化の軽視：昔は「人は建築をつくり、建築は人を育てる」といわれたものだが、今では「文化でなく、今を楽しむ」という風潮となる。団地住まいは腰掛居住などといわれることもある。人は住まいに金をかけなくなってきたともみえる。
- (3) 刹那的思考：今だけ楽しければいいとの考えが横行している。

**9. おわりに** 本稿では、市民に対する専門家の信頼向上を目指して、市民と専門家のコミュニケーションについて実状を検討し、問題点を列挙しながら解決の方向性を提示した。